

## 俵屋宗達と琳派

絵師の俵屋宗達（1570年頃～1640年）は琳派の創始者の一人である。宗達の生年月日や出生地は明らかではないが、京都に自ら開いた工房が江戸時代（1603～1867年）の初期に人気を集めはじめると、その名声も高まっていった。彼の工房では扇や提灯の装飾画を製作し、また室内装飾も手がけた。屏風や襖絵には金や銀の贅沢な色彩を好んで用いたが、これは平安時代（794～1185年）の絵画の様式を復興させたものだと考える研究者もいる。

1616年頃、宗達は書家であり工芸家でもあった本阿弥光悦（1558～1637年）とともに嵯峨本の製作に取り組んだ。これは日本の古典文学のシリーズであり、その絢爛豪華な装丁は、平安時代の洗練された芸術を再び蘇らせることを目指していた。ここからこの2人の長年にわたる協力関係が始まることとなり、それが琳派の形成の基礎を築いたのである。

琳派の作品は、自然の世界の細かな観察や、繊細な彩色、抽象化、そして貴重な画材を用いること、などの特徴がある。日本古来の大和絵と呼ばれる絵画に関連づけられる琳派は、中国絵画の影響を受けた狩野派の絵画とは対照的な存在である。狩野派は狩野正信（1434～1530）が創設した。有名な例は、宗達の国宝「風神雷神図屏風」である。この絵は、全面的に金箔を敷き詰めた広い空間に2人の神が描かれている。この作品は京都国立博物館に収蔵されている。宗達が、絵師の一派や集団の長に与えられる「法橋」という尊称を与えられたのは、彼が1621年に養源院の作品群を完成させたあとであろうと考えられている。